

小島 陽子



鄭 達愚

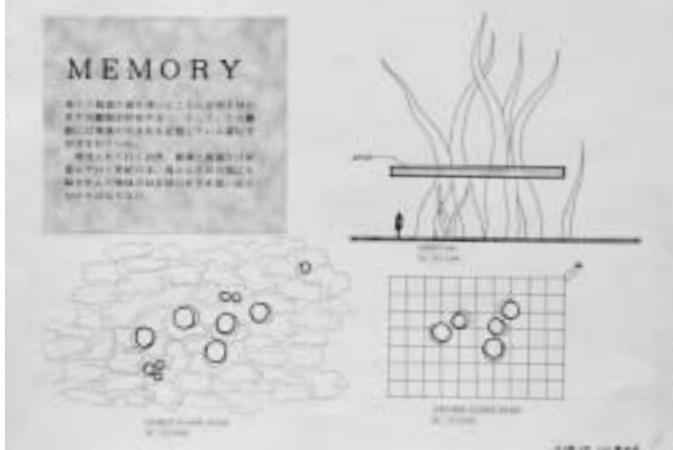


小島 陽子

光は常に変化する。その光をうけ物体は様々な顔をみせる。スリットを設け、光を操作することからこの作品は始まった。平面上の光は直線となり、曲面上の光は曲線となる。これら様々な直線と曲線により、多くの空間体験ができるようになる。

指導=白江 龍三

規定の大きさの直方体の中にプリミティブな機能を各自が設定して、その機能を満たしながら自由に空間をデザインする課題



であった。

小島さんの作品は、与えられた直方体の中に大中小3つの球が浮遊する立体造形があり、そこにスリット状の窓から光の帯を投影して、オブジェに動きと時間の要素を与えようとする作品である。この作品の優れた点は、まず基本的な空間構成が優れていて、さらにその空間を構成する構造体がオブジェとしても魅力的な事。次にこのオブジェに光を投影しているが、このような複雑な操作にも関わらず、空間の構成、オブジェの構成、光のためのスリット等がお互いに相害せず、相乗効果を生む状況を巧みに組み上げている点にある。

大きな球はお椀のような半球で、直方体の上部に斜めに置かれて空間を上下に分割している。このお椀にすくい取られたような半球の上側の空間は、天井が迫った狭い場所だが半球と直方体の隙間から空間が周囲に連続して閉所感がなく、上部のスリットの効果もあって、空に向かう開放感と包まれるような安心感が同居する不思議な安らぎを感じさせる空間になっている。お椀の下側は最も広いスペースだが、中小2つの球が浮遊していて、天井と合わせて球の凸面のみで囲まれる隙間の空間である。ここは危なげな動線設定と相俟って、冒険心をくすぐる。中サイズの球の中は、斜め

のスリットから出入りするオーディオビジュアル空間との事だが、用途に合った適度な閉鎖性がある。このように空間を分割し構成する3つの球は、ノイズのようにはからむ階段と共に、無重力の宇宙を思わせるダイナミックな雰囲気醸している。

鄭 達愚

我々の脳裏の最も深いところにはMEMORYの細胞が存在する。そして、その細胞には地球の生まれを記憶している遺伝子が含まれている。埋没されて行く自然、破壊と崩壊だけが進んでいく世紀の末、我々は生存のために緑を生んだ地球のMEMORYを思い出さなければならない。

指導=宇杉 和夫

この課題では基準となる空間寸法は各自が自己のテーマによって解釈し直し、自己テーマとなる機能の適切なスケールに再構成が可能なものとした。人間が入る(存在する)空間であるが、テーマがはっきりすれば内部空間とは限定しなかった。機能は1つ又は少なく限定させた。テーマにしたのは「自己の」「心の開放」「気晴らし」などの欲求が殆どで、何が彼らをこれほどまでに狭く圧迫しているのか考えさせられた。「他者や環境などの自己でないものにも興味を」といったせいか、行き着くところに「自然」が多かった。しかし結果としてみると、途中は漠然としていたようだが殆どが自己のテーマをもってその空間を表現していた。作品もユニークで興味深く、また個人的にも感応できるものが多くできた。須賀院崇徳君の「斜投影(影)の月」、鈴木貴子さんの「涙の塔」、高橋愛さんの「朝と夕べの反復」、田中布美子さんの「室内の散歩」などは秀作で、できればここで1つ1つを紹介したかった。その中で最も特徴立ったものが鄭達愚君の作品「メモリー(生命誕生)」であった。かれはそれを最後に「海」に求めた。始終変わらなかつたのは「とげ」のような有機体。一見してオブジェのようにみえるが、それではこの作品の価値を見損じてしまう。中空に浮かぶ海のプレートの下と上には、包み込まれる仄かな光の魅力的な空間がある。

基礎製図法

第2課題 内部空間の把握と構成・表現

1年2組

- 担当= 石田 道孝 宇杉 和夫 小石川 正男 小松 清路 白江 龍三